Web デザインコンテストによる技術・文化の相互啓発で育つグローバル人材

穴田 有一*1・広奥 暢*3・谷川 健*2・サイモン ソーラ*2・
隼田 尚彦*3・齋藤 一*3・安田 光孝*3・川上 正博*3
Email: anada@do-johodai.ac.jp

*1: 北海道情報大学 経営情報学部 先端経営学科
*2: 北海道情報大学 経営情報学部 システム情報学科
*3: 北海道情報大学情報メディア学部 情報メディア学科

◎Key Words Web デザイン，コンテスト，グローバル人材

1. はじめに

IT をはじめとする高度な技術や科学知識が社会システムの隅々に浸透した知識基盤社会への移行は，社会構造の複雑化を生じるとともに，様々な国・地域が相互に依存しなければ成り立たないグローバ化を生じる。そこでは，高等教育の役割は飛躍的に増大し，とりわけ大学は，グローバル人材を育成することで主要な役割を果たす。(1)(2) グローバル人材の要件は，単に英語でコミュニケーションできるということではなく，主体性・積極性，チャレンジ精神，協調性・柔軟性，責任感・使命感があること，さらに，異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティーを持っていることである。(3) すでに多くの大学が，グローバル人材の育成を進めている。(4)(5)

本学は， ICT を活用した国際性を育む教育を進めているが，その一つが本報告で取り上げる Web デザインコンテストによるグローバル人材育成プログラムである。このプログラムは，異文化を背景に持つ海外の学生と Web 作品の制作を通して行う交流によりグローバル人材を育成するものである。2007 年度に本学と交流協定を締結したタイ王国・ラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校（RMUTT）の学生との交流プログラムとして 2008 年度から開始し，現在まで継続している。

2. Web デザインコンテストによる学生交流

2.1 経緯

本学では，2000 年度から教員の有志が，学内で Web デザインコンテスト（WDC）を始めた。その目的は，授業時間以外の活動として，学生が自主的にコンピュータ技術とコンテンツ作成能力・表現力を磨くとともに，自主的な創作活動を体験することである。2007 年 7 月に本学と RMUTT は，学生の交流，教職員の交流，共同の研究教育活動の促進を交流の範囲とする交流協定を締結し，具体的な交流プログラムを進めてきた。その一つが2008年度から始めたWebデザインコンテストによる学生交流（iWDC）である。これは，それまで学内だけで行っていた Web デザインコンテストを発展させ，世界を舞台に学生の自主的学修活動を展開しようとするものである。

2008 年度と 2009 年度は，両大学がそれぞれ学内で行った Web デザインコンテストから優秀な作品を選抜し，両大学間の国際コンテストを実施した。作品審査は，両大学の審査委員から構成される審査委員会がインターネット上で作品を審査し，受賞作品を決めるという方法で実施した。受賞者の内，本学学生が RMUTT を訪問して表彰式に出席し，文化研修，学生交流を行う一方通行の交流である。この間の学生訪問は，日本私立学校振興・共済事業団の資金援助により実施した。

2010 年度は資金援助を得ることができず，学生訪問を伴わない国際コンテストのみの実施であったが，2011 年度からは，学生支援機構の国際交流奨学金の支援を受けて，双方向の学生交流として実施してきた。この年から，それまでの国際コンテストに加えて，ワークショップ形式の Web 作品共同制作を行い，グローバル人材育成の充実に向けてプログラムを充実した。さらに，2013 年度からは，単位認定の対象となり，本学では「国際コラボレーション」という名称で 2 単位を付与する授業科目として認定された。RMUTT においても同時に単位認定されることになった。

2.2 iWDC ワークショップ

国際 Web デザインコンテスト（iWDC）エントリー作品は，学内コンテスト（WDC）で選抜された後，作品コンテンツを英文化し，審査対象となる。前節で述べた 2011 年度からの交流プログラム概要を図 1 に示した。2010 年度までのプログラムとの違いは，図 1 の破線枠内の相互訪問の部分である。相互訪問によるワークショップは，本学と RMUTT を会場にして，2 回連続して行われる。前半のワークショップ（WS Ⅰ）では，基調講演，オリエンテーション，講義，そしてグループ編成を行った後，共同制作作業にはいる。その間，学外での取材活動，文化研修，他の学生との交流会などを行う。共同制作，取材活動など両大学学生の共同作業は原則として英語で行われる。後半のワークショップ（WS Ⅱ）は，基調講演とオリエンテーションに引き続き，すぐに共同制作にはいる。また，学外での取材活動，文化研修を行い，作品を完成させる。完成させた作品については，ワークショップ最終日のワークショップ作品発表会で，各グループが英語で紹介する。

2013 年度から，このプログラムは単位認定する授業科目となったため，作品発表会の後に，両大学教員による成績会議が行われる。その後，相互訪問の前に行われたiWDCの表彰式が行われ全プログラムが終了する。

なお，iWDC のための Web 作品コンテンツ英文化および共同制作でのコミュニケーション，英語による作品発表などで英語が必要になるが，ワークショップに先立つ事前授業やワークショップで指導教員の支援が行われる。

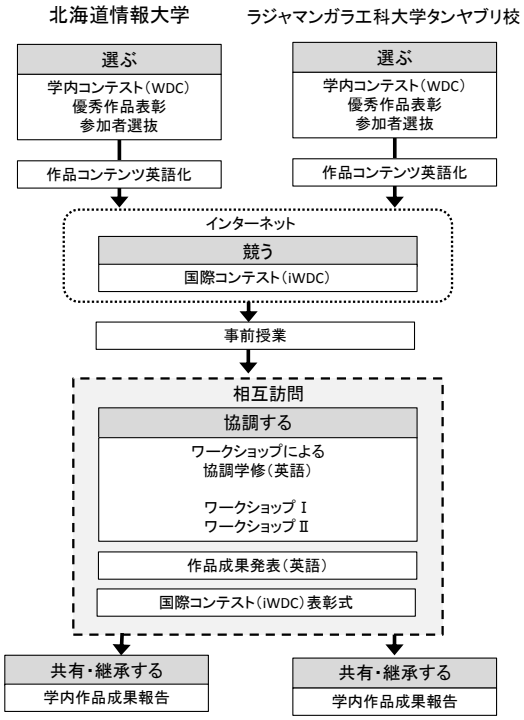

図1　iWDCモデル

3.　iWDC モデルによるグローバル人材育成

3.1　プログラムの目的

本プログラムに学生が参加する条件は，事前のコンテストで入賞することであるが，その他に語学を含め一定の成績基準を超えなければならない。ユニバーサル・アクセス時代を迎えた今日の大学生の学力は多様であるが，このプログラムは，ある程度の学力を備えた学生をグルーバル人材として育成するものである。

3.2　iWDC モデル

上の目的を達成するために，本プログラムでは，次の 4 つの達成目標を定めている。

(1) Web 技術，インターネット技術，コンテンツ表現力を向上させる。
(2) グローバルコミュニケーション力を向上させる。
(3) 相互の文化を深く理解する。
(4) 学生相互の友情を育む。

これらの目的，達成目標を学生たちが成し遂げる仕組みとして図 1 に示すプログラムを実施しているが，これをわれわれはiWDC モデルと名付けている。

達成目標(1)については，図 1 の「選ぶ」および「競う」過程で向上する。また，「協調する」過程でも異文化を背景に持つ学生同士の協調学修により新たに学ぶことが多い。

(2)につては，著しい成長がみられる。それは，多くの単語を覚えたとか，文法の理解が進んだということではなく，学生がすでに持っていた英語力を生かせるようになったということである。ワークショップ開始時には，英語で話すことに気おくれしていた学生が，RMUTT の学生との共同作業でやむを得ず英語を使ううちに気後れせずに話せるようになる。

ワークショップの共同制作作品のテーマは「タイと日本の文化の比較」である。このようなテーマのもとで各グループがトピックを考え作品を制作する中で(3)の達成を目指す。

本プログラムが最も重視しているのが(4)である。ワークショップ終了後の送別会で別れを惜しむ学生たちの姿には毎年感動する。学生たちはプログラム終了後も SNS などで交流を続けている。このプログラムで，学生たちは海外に友人がいることの喜びを知る。

事後報告会はこのプログラムの成果を「共有・継承する」ものであるが，学生たちは SNS により自発的に共有・継承している。

4.　今後の進め方

本プログラムによりグローバル人材育成を目指し，成果を上げたと考えているが，冒頭で述べたグローバル人材の要件の内，主体性・積極性，責任感・使命感については，まだ十分ではないと考えている。これは，今後改善すべき課題である。

一方，今年度はiWDC の他にショートフィルムコンテスト（iSFC）を加え，来年度以降は，さらに，コンピュータ・プログラミング・コンテスト（iCPC），ET ロボット・コンテスト（iETC）を加える方向で検討を進めている。

5.　おわりに

本プログラムは，2007 年度から 2009 年度は日本私立学校振興・共済事業団（教育・学習方法等改善支援），20011 年度から 2012 年度は学生支援機構（SS&SV），20013 年度からは学生支援機構（留学生交流支援制度（短期派遣・短期受入れ））の支援を受けて行われていいます。また，北海道情報大学，タイ王国・ラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校のご理解とご支援により実施してきました。この紙面にて謝意を表します。

参考文献

(1) 教育再生実行会議：第 3 次提言，pp1-5 参照（2013）
(2) グローバル人材育成会議：グローバル人材育成戦略，p8 参照（2012）.
(3) グローバル人材育成会議：グローバル人材育成戦略，pp3-7 参照（2012）.
(4) 独立行政法人 大学評価・学位授与機構：ASEAN+3 質保証フォーラム資料（第 2 部「キャンパス・アジア」東アジアの学生交流状況），http://www.niad.ac.jp/n_kenkyukai/1224452_1207.htm（2013）
(5) 日本学術振興会：大学の世界展開力強化事業，http://www.jsps.go.jp/j-tenkairyoku/h23_kekka_saitakua.html（2011）